



百花為序
卷之四

百花為序

東坡先生



至者何若夫花鳥之
山百也夫祝爵建穀徐丹揮
甲宗森何和未之輕植了之
嘉地是鵲鸛鴛鸚鸚
以非尼田之其羽誰何鳥

百花為序

楓花鳥百可以寒子為萬
 在子花鳥為之枕其枕得
 枕河福之餘錄是觀則
 非特為不百花至心
 可區悉屯鳥既別中又
 生去展玩如法花而每

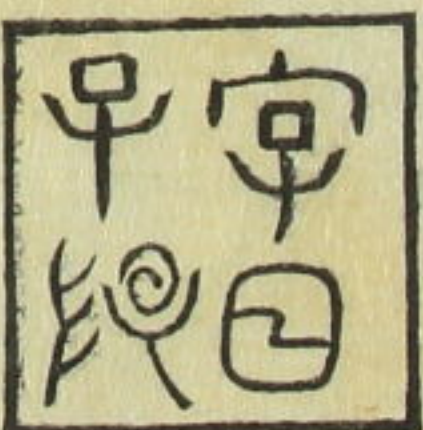
在後志帶一露者之風
 者早烟去一歷雪去橫
 在向陽者為而細去翁
 者嘖者悲去相共枯者
 抗去搏者睡去單枝者
 雙標者刷綉去無多出

有者也 所憐無改 嗟
 以始 可 無教 都 終 以 操
 自異 雖 終 一 七 以 悅 自 志 後
 蘇 友 依 繁 平 昏 隼 之
 有 者 豈 謂 多 情 終 乎 如 豎
 素 而 未 成 縮 則 附 丹

鉛 之 方 苟 已 意 後 素 技
 何 付 之 恒 之 化 之 神 則
 百 為 一 心 子 可 也 可 以 矣
 是 也 無 編 者 之 意 邪 石
 中 子 函 索 也 之 樣 可 矣 矣
 者 因 兩 廟 雪 豈 可 序 於 余

於是年三月廿五日
享保茂申秋月雨夜

東為龍洲李德鳴鳳誌



百華鳥圖

孟隣坐狩野探雪守完門人

野之鬢髮山下石仲子守範鳥

勸時雌星花
蜃氣樓輝山
高橋 範明 校
小早川豐次

附言

一大東言盡者不可勝算矣。中世有狩
野祐勢永仙二子。特啓厥迪而遂為

狩埜氏之箕裘。乃其妙至探幽。以成一家。凡仙佛山川人物花卉。淡墨傳彩。皆能兼之。以獨步于海內。至今世之鳴畫。無不沿其流者。矣。故寸縮尺楮。散落人寰者。戶收家藏。可不謂卓犖不偶者乎。

一百華鳥舊本。出探幽手筆。而為魁本帖子。獨為豪家。見占斷石仲子嘗學。狩野氏者有年。遂歸其本。為小冊子。附剖劂氏公之干世。

一丹鉛之有方。專門家所秘。今已洩機。恐獲蠶大方。亦惠後進好事者。

一艸木之真偽。禽鳥之區別。古人其猶病焉。非畫家所識。悉隨舊本。更俟博洽之人。

一刻將就梓。遂加贊辭於其上。聊做萃

人之顛算其丹青家務專干業。豪嬾詞
 賦者。豈以分溜瀉為故。歌詩灸輶隨
 得錄之云。

灞雪道人岩蹇驢記

法印探幽之。而公等端。亦
 天下之。能。上。王公大人
 より。士曲。匠。為。年。に。如。う。の
 わら。屋。糶。を。る。せ。い。さ。う。の。名
 ち。さ。ら。も。さ。ら。の。や。も。か。い。の。名
 水。さ。ら。も。さ。ら。の。や。も。か。い。の。名
 へ。の。能。借。の。句。を。さ。ら。も。さ。ら。の。や。も。か。い。の。名

物にありあるを清く
 其粒あるを裁あはれ
 狂うるを志なきわら
 さしらよ秋の如く
 夢さしらよ鳥の如く
 ありありありありあり
 弦よありありありあり

花をよめるよめるよめる
 花をよめるよめるよめる
 花をよめるよめるよめる

識上手

紫野居士の致由



畫圖百花鳥總目

卷之一

桐鳳凰 きりやうほう
 磐梨就鳥 いせなりじゅう
 石荷鵲 いせのり
 竹萬年青鶴 たけまねあせ
 野菊白鳥 のぎくはく
 水蓼白雁 みづれうはく

一 三 五 七 九 十一

葵孔雀 あひく
 朴木鶴鷹 うすき
 松董鶴 まつどう
 萱草遊鶻 うんそう
 玉蜀黍雁 たまご
 仙翁蒼鸞 せんおう

二 四 六 八 十 十二

長春吐綬雞 ちやうしゅんじゆいけい 十三

千日紅鷄似錦雞 せんじつこうけいじゆきんけい 十四

茶藤錦雞 ちまふき きんけい 十五

梨子精衛 りしゆせいゑい 十六

華鬘きんみの鳥 けまん 十七

躑躅白鷗 つづくしろく 十八

木凡山雉 まふしやん 十九

菱鷓 ひしやうのとり 二十

卷之二

川原桔梗蒼鷺 かわらききょうあざさぎ 廿一

勢井草野雁 せいかさりのん 廿二

澤瀉鴨 たくさ鴨 廿三

石斛鷓鴣 せきこく 廿四

小蓮華鷓鴣 こせんけいさいさぎ 廿五

苦薏龜鳥 くゐきくわあ 廿六

菊雉子 きくきす 廿七

蓮鷺 れんすさぎ 廿八

水葵水札 みづあひのけり 廿九

白苜鴛鴦 あまめ 三十

萍蓬草鷓鴣渠 ういぼく 卅一

南京梅南京鳩 なんきんめいなんきんこ 卅二

金盞花雞 きんせんかひどり 卅三

南燭鸚鵡 なんてんひよどり 卅四

志田刀鴨 したたう鴨 卅五

剪春羅千鳥 せんしゆんら 卅六

鳶尾鵲 いづえつ 卅七

嵐麴艸鷗 あざなこさ 卅八

金絲桃鵲斑鷓 きんしつたふまき 卅九

梅鷓 むい 四十

茶樹四十雀 ちまのき 四十一

福壽草と地鳥 ふくじゆそう 四十二

瞿麥風鳥

四十三

檀特鷓

四十四

杏子鵲

四十五

紫菀鷓

四十六

桺三光

四十七

荒世伊登宇

四十八

紅奪鳩鵲

四十九

虎杖あぎぢ

五十

卷之三

李紅雀

五十一

山茶花鷓

五十二

秋海棠鷓鵲

五十三

糸櫻練雀

五十四

瞿子栗鷓

五十五

鼓子花鷓鵲

五十六

蒲公英雲雀

五十七

黃蜀葵雀

五十八

櫻秦吉了

五十九

豆藤小陵鳥

六十

芍藥畫眉鳥

六十一

覆盆子翡翠

六十二

白木蓮華桑鷹

六十三

牡丹菊戴

六十四

茱萸頂小鳩

六十五

石榴八頭

六十六

葛鷓

六十七

こくつとまき文鳥

六十八

水仙鵲

六十九

石竹比翼鳥

七十

桔梗黑鶉

七十一

丁子草尾長

七十二

卷之四

郊苍杜鵑	七十三	雞冠鳴	七十四
連翹翠雀	七十五	風蘭啄木鳥	七十六
沙羅雙樹碧鳥	七十七	牽牛苍忍あごの	七十八
百合深山頰白	七十九	仙臺萩鳥	八十
芝蘭鶉	八十一	椿青鳩	八十二
海棠黄鳥	八十三	萩鶉	八十四
さんしほ木秋鷲	八十五	木槿きんぎょ	八十六

卷之五

桃音呼	八十七	鷹爪山雀	八十八
柏繡眼兒	八十九	木芙蓉鶉	九十
刈萱白雲雀	九十一	柿花山鵲	九十二
木綿唯紅鳥	九十三	藤燕	九十四
笑靨櫻桑鳥	九十五	蘭駒鳥	九十六
風車川原鷓	九十七	さあやういざう	九十八
辛夷木兎	九十九	枇杷鶉	百

日光山慈悲心鳥

總羅漢寺 阿蘭陀繪

高野山佛法僧鳥

花鳥寫 左右

附録

誹諧

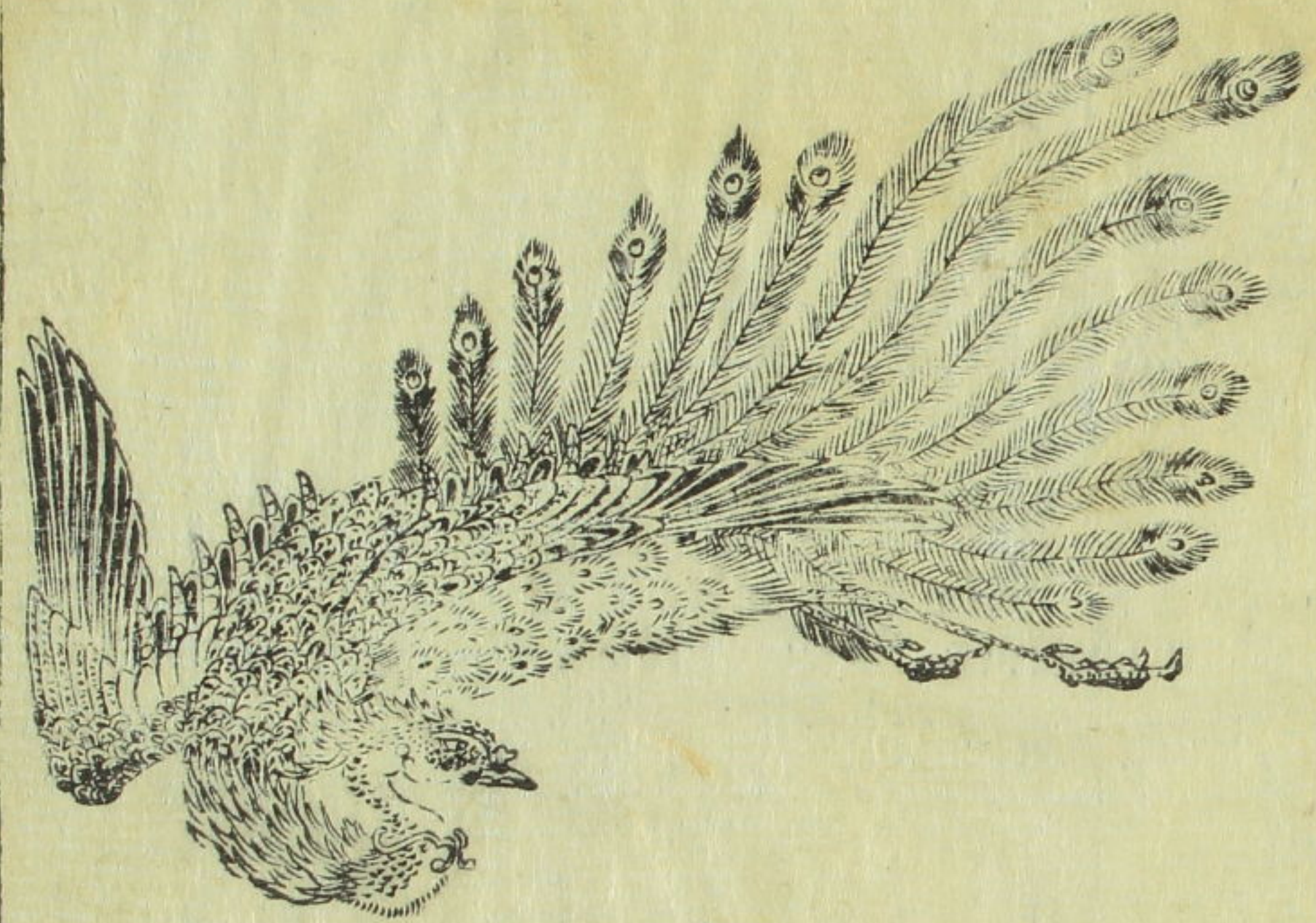
歌仙 四卷

百韻 二卷

百花鳥總目終

鳥くれや相ふくみ乃御代の鳥

露沾子



くまも鶴の禱や入りひ

長江亭 沾風



第三

鶯梨

鶯梨うぐいすは付立草の汁初書花を
の具付立草と名づくは日く
朱ども

鶯うぐいす 鶯うぐいす 鶯うぐいす 鶯うぐいす 鶯うぐいす

目の内ごん入上こあまうけこ鶯うぐいすの具
とみふぬとあづこ白備こうけは地
じやうこわうこごんことこまこぬこぬこ
ととこまこぬこぬこぬこぬこ
うんこぬこ
全祥こははは地こごんことこぬこぬこ
ととこまこぬこぬこぬこぬこ
ありもこごんことこぬこぬこぬこぬこ
ありもこごんことこぬこぬこぬこぬこ
ととこまこぬこぬこぬこぬこ

第四

朴本

朴本うすは地草の汁より濃こくろこうこけ
まの汁こをこぬこぬこぬこぬこ
くまこぬこぬこぬこぬこぬこ
たこぬこぬこぬこぬこぬこ
よこぬこぬこぬこぬこぬこ
本のこぬこぬこぬこぬこぬこ
合こぬこぬこぬこぬこぬこ

鶴鷹おんたう 大鷹おんたう

目の内こぬこぬこぬこぬこぬこ
備こぬこぬこぬこぬこぬこ
大こぬこぬこぬこぬこぬこ
各こぬこぬこぬこぬこぬこ
ごこぬこぬこぬこぬこぬこ
去こぬこぬこぬこぬこぬこ

鷹人のむらりや卯月原 舎人



大門 鷲目配
西月、石の口紅



峯 園香
水

雨收萱草色
日抱野禽聲

白主



白鳥の池を望む景の草花

席文

露のついでに月序の仙鶴

露人



長きよりの鶴やの思ひ

露月



十三

月季花

長春

葉小綿毛ありりりら花密くこぼり
けして花多し具ありあやう花の
より花ごらんてんはうらうら
ト色少はくはまべ

吐綾雞

月の四角どみ家様しはけちをさ白
けごらんは也耳頬赤くもくは
くま背中まごの具ありらやとけ
の如く背のり赤くもくは
風物おまの具ありら尾白綿の具
るま先は若のけはぬるり金けの
物あり合英土してわりもはそ
かま毛虫金泥を入後合をま
ごらんを入は白綿若のけは
わりもくはけり若のけはま
色わりとまをまはけり鳥をの
といつう則はまをまをま

十四

千日紅

葉小綿毛付まよりら花密くこぼり
けして花多し具ありあやう花の
より花ごらんてんはうらうら
まのけはまをま

錦雞

月の四角どみ背肉色多しは
色とま赤くまは背中まごの具
はまもみ毛虫ありにまをま
のり背中にまのり金泥して
おまのけはり白くまをま
又白くまをまをまをまをま
全背雞は月トはまをまをま

とけむや鶴れりりりり

日光 雪 溪



井出やうれ錦鶏宿はの川中ん

自嘯



十五

茶藤

棟棠 醪醪

葉小緑まよりくは糸去皆茶の汁並
白緑まの汁まよひドくりたるまは具
くたな白緑まどごんりては立

錦鶏

目の内赤まよりくは糸去皆茶の汁並
まよひドくりたるまは具
くたな白緑まどごんりては立
すし今泥背中緑ま有紺まはて競入ん羽
まよひ茶まどごんりては立
糸去皆茶の汁まよひドくりたるまは具
くたな白緑まどごんりては立
赤し肉をわり茶はては立
入目毛去脈赤まよりくは糸去皆茶の汁並
の毛よりぬまよりくは糸去皆茶の汁並
足まの具まよひドくりたるまは具

十六

梨花

葉二ん緑まよりくは糸去皆茶の汁並
り地ゆるくの具まよひドくりたるまは具
くたな白緑まどごんりては立
白ごんりては立

精衛

葉二ん緑まよりくは糸去皆茶の汁並
り地ゆるくの具まよひドくりたるまは具
くたな白緑まどごんりては立
白ごんりては立
赤し肉をわり茶はては立
入目毛去脈赤まよりくは糸去皆茶の汁並
の毛よりぬまよりくは糸去皆茶の汁並
足まの具まよひドくりたるまは具

細うすにけか咲る鳥もあまふ

乙丸



清一艶 一林ノ雪 春一鬼 巳化ノ禽
長三街 枝ノ葉ヲ去 滄一海 孝一思 深

森如尹



十七

華鬘けまん

此鳥の尾は正をさうりま

花を下の奥けきせり多やうは鳥乃色
いろもあやほほろようめんぶらり合え
まふは三つ一葉白羽けきまのけ
らまふまよひまごんさうりま

まんみの鳥

此鳥は只月をさうりま
も地を白羽けりよれほまてせりま
けみの毛羽けりろくまうは鳥のけ毛
まの奥けりまは月をまわり腹ま
ごんまの鳥けりまは月をまわり腹ま
ごんまの鳥けりまは月をまわり腹ま

十八

躑躅しゆく

黄杜鵑 白杜鵑
入あり 又 杜鵑花

この肉色わりまはしてはまをさうりま
まの奥けりまは月をまわり腹ま
ごんまの鳥けりまは月をまわり腹ま
ごんまの鳥けりまは月をまわり腹ま

白鵬くろえん

この肉色わりまはしてはまをさうりま
まの奥けりまは月をまわり腹ま
ごんまの鳥けりまは月をまわり腹ま
ごんまの鳥けりまは月をまわり腹ま



白鵬やけりまの葉をまわりま

山 紗

引涼亭 子石



引涼亭 子石

十九

木瓜 檀子 木桃 木李

花肉色上ニ朱をくぐり赤毛をばらりり
仕立しきくわいさうれ具を用や差
白濁してより葉小偏まきものけあま

小雉

目の内朱曇面赤く朱くは早くあやつと
入嘴足と目一但し其の具はさうはすくわり
合符豆言ふは上ニ朱いんくまは脊中少けお土
ちをわび一毛去朱がごんをんてまは
べいんんごんはは毛去版景くは乃
上ニ合まごごけごん毛去む朱ごんは
まぬ入る一親の府朱ごんか偏あまり
かし色淡つし仕立べい

二十

菱 菱 水栗 沙角

花肉色上ニ朱をくぐり赤毛をばらりり
仕立しきくわいさうれ具を用や差
白濁してより葉小偏まきものけあま

藿

目の内朱曇面赤く朱くは早くあやつと
入嘴足と目一但し其の具はさうはすくわり
合符豆言ふは上ニ朱いんくまは脊中少けお土
ちをわび一毛去朱がごんをんてまは
べいんんごんはは毛去版景くは乃
上ニ合まごごけごん毛去む朱ごんは
まぬ入る一親の府朱ごんか偏あまり
かし色淡つし仕立べい

昔吟如くく鳥の歌の深くは

貞磨



